

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：35409

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380863

研究課題名(和文) 男女平等意識の継承に関する研究：母親と娘の「語り」を通して

研究課題名(英文) The succession of egalitarian attitude from mothers to their daughters

研究代表者

青野 篤子 (AONO, Atsuko)

福山大学・人間文化学部・教授

研究者番号：70202489

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、母親から娘への男女平等意識の継承性について、質的・量的な検討を行った。母親と娘の語りの内容を複線径路・等至性モデル(TEM)によって分析したところ、娘の男女平等意識には、母親の助言や支持的な態度が、家庭優先の考え方には専業主婦である母親の姿や無関心な態度がかかわっていること、フェミニストの母親は、直接男女平等を教えるわけではなく、その生き方を通して娘に影響力を与えていることがわかった。また、質問紙調査により母親と娘の男女平等観を比較検討した結果、娘の男女平等観は母親の男女平等観と類似していること、実質的平等観には、母親への信頼感や母親の充実感が影響を及ぼしていることが見出された。

研究成果の概要(英文)：This study explored inherited egalitarian attitudes from mothers to daughters from a qualitative and quantitative perspective. The analysis through Trajectory Equifinality Model (TEM) showed that mothers' advice or supportive attitudes were related to daughters' egalitarian consciousness, and that feminist mothers exerted an influence on their daughters' future plans not by teaching gender equality directly, but by demonstrating their own life-styles. Furthermore, the study's quantitative results showed that daughters' views of gender equality were similar to their mothers', and daughters' egalitarian attitudes were elevated by trust in their mothers' level of life satisfaction.

研究分野：ジェンダー心理学

キーワード：男女平等意識 フェミニズム 継承性 母親 娘

1. 研究開始当初の背景

日本では社会的地位の男女格差が大きい上、近年は男女平等に対する揺り戻しや若者の保守化傾向も指摘されている。これには、個人のライフサイクルにおける意識変化と、世代を超えた意識の継承という両側面が影響を与えていると考えられる。

フェミニスト第一世代は、男女平等主義に傾倒しつつも、時代に固有なジェンダー・ロールに縛られていると言っても過言ではない。また、多重な役割を担うなかで、公的領域(職場や学校)と私的領域(家庭や私生活)の乖離(たとえば教師として理想を述べるが、母親としては保守的であるなど)も免れない。これは、母親たちの内面に理想と現実との葛藤をもたらし、娘たちには言行不一致の印象を与えるであろう。すなわち、母親から娘への男女平等意識の継承には、幾層にも困難が横たわっている。

本研究は、単なる世代間比較ではなく、男女平等意識が個人の中でどのように変化し、世代を超えてどのように継承されていくのか(されないのか)を、母親と娘に対する量的・質的調査により明らかにしようとした。

2. 研究の目的

本研究は、母親と娘のペアを対象に、男女平等意識の継承のプロセスを量的・質的側面から分析することにより、男女平等意識の実態と、その継承を阻害する要因と促進する要因を解明することを目的とした。

インタビュー調査では、それぞれの「語り」を分析して意識の変化点を見つけ、個人的経験の影響や母娘相互の影響を探った。質問紙調査では、ペア・データをもとに継承のパターンを抽出し、諸要因との関係を分析した。さらに量的分析と質的分析を統合して、男女平等意識の継承に影響を与える要因を検討した。

3. 研究の方法

(1)インタビュー調査

(1)-1 女性大学生に対するインタビュー調査

2013年6月~7月に、研究代表者が所属する大学の女性大学生(学部が偏らないようにした)12名に対して、研究への同意を得た上で、研究代表者の指導のもとで女性大学生1名がインタビューを行った。子ども時代(小学生くらいまで)の経験(とくに勉強や遊び、友だち・親子関係について)と母親の思い出、中学生・高校生の頃の経験(とくに進路や進学について)と母親の思い出、現在の大学生活(とくに進路・就職について)と母親との関係、将来の希望(とくに仕事と結婚・家庭について)と母親の期待について、約1時間にわたり半構造化面接を行った。インタビュー内容をすべて逐語録にし、複線径路・等至性モデル(Trajectory Equifinality Model: TEM)(安田・サトウ, 2012)による図の作成と分析を行った。具体的には、まず、男女

平等意識が関係していると思われる事象を時間軸に沿って並べた。結婚や出産後も仕事を継続するつもりかどうか注目して、それらを両極性等至点(P-EFP)とし、それに至る大学卒業から就職、結婚、出産というライフイベントごとに分岐点(BFP)を加えてTEM図を作成した。そして、男女平等主義を志向する娘の人生設計に対して、母親その他の社会的エイジェントによる促進的な影響(社会的ガイド, SG)ないし抑制的な影響(社会的方向付け, SD)があると想定した。(1)-2 フェミニストの母親とその娘に対するインタビュー調査

Aさん母娘:筆者の知り合いである近畿地方の大学の女性教員(52歳)とその娘(23歳)。Bさん母娘:その人の紹介による、同じく近畿地方を拠点に外国で日本語教師をしている女性(55歳)とその娘(22歳)。Cさん母娘:筆者の知人からの紹介で、北陸地方で牧場を経営し、女性のネットワークをめざすNPO法人の代表を務めた女性(66歳)とその娘(39歳)に対して、2014年2月から10月にかけて母娘別々に1時間半程度の半構造化面接を行った。母親には、娘時代の経験と目標、仕事と家庭についての考え方、子育ての方針、娘に対する期待、男女平等・男女共同参画についての考え方、これからの人生設計、家族について、娘には、仕事と家庭についての考え方、母親をどう思うか、男女平等・男女共同参画についての考え方、父親を含む他の家族との関係について質問した。インタビュー内容を逐語録に起こし、TEM図を作成した。作成されたTEM図に対して協力者から意見をもらい、必要な修正を加えた。

(2)質問紙調査

(2)-1 母娘のペア調査

2014年12月に民間の調査会社に依頼し、母娘ペアにweb調査を実施した。回答が得られた、20~30歳代の娘とその母親207組を分析対象とした。調査内容は以下の通りである。

男女平等観 宇井(2002, 2005), Ui & Matsui(2008)を基に、大学生に予備調査を行い、46項目から成る男女平等観尺度を作成し、各項目について「賛成である(5)」~「反対である(1)」の5件法で回答を求めた。

性差観 伊藤(1997)の性差観尺度から10項目を用い、「そう思う(4)」~「そう思わない(1)」の4件法で回答を求めた。

精神的健康 Goldberg(中川訳)の一般健康調査票(GHQ)12項目に4段階で回答を求めた(得点が低いほど健康)。

生き方満足度を100点満点でたずねた。

娘の母親観 小高(1998)による青年の親に対する態度・行動尺度から、母親を独立した個人として認知する傾向をとらえる4項目を採用し、「非常に当てはまる(5)」~「全く当てはまらない(1)」の5件法で回答を求めた。

(2)-2 男女大学生に対する調査

Web 調査と同時期に、研究代表者と研究協力者が所属する大学を中心に男女大学生の参加を得て、(2)-1 と同じ内容の質問紙調査を行った。503 名から回答が得られた。このうち、24 歳以下の者で、各因子で欠損値が一つ以内であった 482 名(男性 192 名、女性 290 名)を分析対象とした。この調査は、男女大学生での差異がないかどうかを検討するために行われた。

4. 研究成果

(1)男女平等意識継承のパターン

12 名の女性大学生へのインタビュー調査より、男女平等意識の継承においていくつかの類型が見出された。図 1 には、高校生頃に形成された自律的・他律的な態度から、仕事優先か家庭優先(その間の両立)かの将来展望に至るまでの複線的な経路を示している。図中の BFP は分岐点(複数ある)、OPP は必須通過点、P-EFP は両極化した等至点、SD は社会的方向づけ(複数ある)、SG は社会的ガイド(複数ある)を意味する。これにより、類型ごとの娘の男女平等意識に及ぼす母親の影響を理解することができる。

高校卒業までに自律的な態度を身に付けるかどうかは一つの大きな分岐点になっており、母親の働く姿や聴く姿勢が関わっている。逆に口やかましい母親のもとで娘は他律的になりがちである。そこから、県外の大学に進学するか地元の大学に残るかという分岐点、就職活動や将来設計に積極的にコミットするかどうかという分岐点を経て、大学卒業に至ると考えられる。これはだれもが経験するであろう必須通過点である。将来については、大半の人が仕事も家庭も大切にしたいという展望をもっているが、子どもの存在や夫の意向など外的な要因によって仕事優先か家庭優先かの選択肢を視野に入れており、両極化した等至点となっている。仕事優先の考え方には、母親の助言や支持的態度がかかわっており、家庭優先の考え方には専業主婦である母親の姿、親の価値観、家庭の事情、無関心がかかわっていると考えられる。

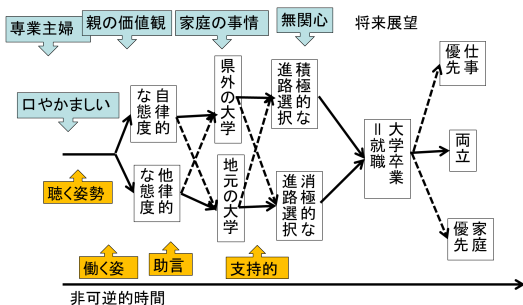


図 1 男女平等意識継承の類型化

(2)フェミニストの母親から娘への継承性

上記(1)-2 の研究参加者の母親は、いずれも、第二波フェミニズムの影響を少なからず受

けている人たちである。いずれもフェミニストと自称していなかったが、フェミニズムに共感的であり、自分自身の人生を自分で決めてきたという点で「フェミニスト的」である。また、女性の自立や解放をめざす活動に参加した経験をもつ。Aさんは子育てサークルを主宰、Bさんは女性学関係の雑誌の編集に参加、Cさんは農村女性のネットワークづくりをリードしてきた。一方、その娘たちも、男性に依存せず、経済的自立をめざし、他の女性のため、社会のために何かやろうとしている点でフェミニスト的な生き方を志向していた。

母親と娘の男女平等観には関連があるが(青野・澤田・宇井・滑田, 2015)、母親がフェミニストであるからと言って必ずしも娘がフェミニストになるとは限らないということは多くの研究で指摘されている(コール・ズッカー・ダンカン, 2004)。では、この母親たちと娘たちをつなぐものはいったい何なのだろうか。

母親がフェミニストであるがゆえに娘への期待は強いものがあると予測されたが、3名の母親からそれは感じられなかった。娘への期待は自らへの課題ととらえなおす母親の姿は、Aさんが娘を出産したときに娘に願った「自立はむしろ自らの課題だった」と語られたエピソードからも理解される。フェミニストの母親は、娘にフェミニストであれと期待するわけでもなく、フェミニストとしての考え方を直接伝えるわけでもない。むしろ、自らの生きざまを通して生きることの意味を娘に影響を与えていると考えられる。Aさん母娘のTEM図を図2に示している。これからも、母親の人生の分岐が娘の人生の選択に影響を与えていることが示唆される。

母親たちは、自分の目標を追求するなかで、自立した女性のモデルを娘に示してきたと言えるだろう。それは、自分は自分、娘は娘というスタンスを示すことでもある。母親が娘の主体性を尊重したことは、娘の選択の幅を広げると同時に、娘がある一つの方向性をもって選択を推し進めることになったのではないだろうか。娘Aさんは、将来の目標が明確だからこそ多くの分岐点に遭遇し、そのつど悩みながらも納得のゆく選択をしているように思われる(図2)。娘BさんはTEM図ではやや平坦な人生径路を歩んでいるように見えるが、海外でも活躍する母親を尊敬しながらも、自らは地に足をつけた母とは異なる道を選択してきた。娘Cさんも娘Aさん同様、明確な目標をもち、その都度考え抜いた選択を行ってきたように見える。

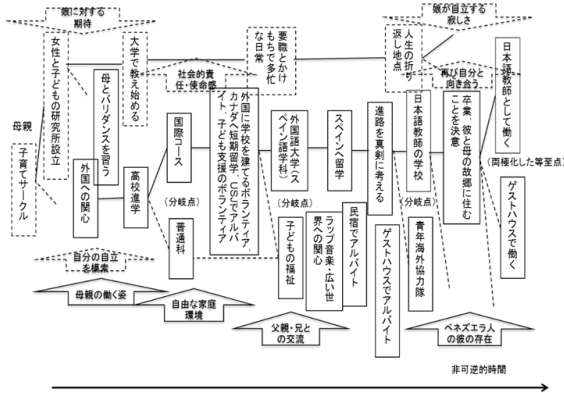


図2 Aさん母娘のTEM図

この研究のもう一つの成果として、TEM図とトランスビューが非常に有効であったことを指摘しておきたい。協力者たちに人生を改めて振り返る機会を与え、研究者には聞き取った内容を確認する機会を与えてくれたと同時に、母・娘の双方が、近いようだが意外と知られていない母・娘の側面をお互いに知ることができ、重ね合わせることができた点である。

ただ、この研究には限界がある。それは、TEM図で2人の人生経路を関連付けることの難しさである。相互の影響過程についてのより詳細なインタビューを行う必要があるだろう。また、スノーボールサンプリングによる限界である。本研究の参加者はたまたま良好な母娘関係にある人たちだったと言えるかもしれない。より多くの多様な参加者(統制群の設定を含む)を得て、男女平等意識の継承という問題を検討する必要がある。

(3)娘の男女平等観に影響を与える要因の検討

男女平等観尺度の因子分析の結果、「均等配分」(6項目: $\alpha=.79$)、「個人の能力」(3項目: $\alpha=.79$)、「男女の特性」(3項目: $\alpha=.51$)、「必要性」(3項目: $\alpha=.37$)、「機会の平等」(4項目: $\alpha=.76$)、「話し合いによる決定」(5項目: $\alpha=.87$)の6因子が確認された。

母親の男女平等の判断基準(6因子)と娘の母親観(5因子)および性差観、娘の母親観および性差観と娘自身の男女平等の判断基準との関連を検討するために、尺度得点間の相関係数を算出した。その結果、母親の男女の特性の原理が強いほど、あるいは、機会の平等、個人の能力、話し合いによる手続的公正の原理が弱いほど、娘の性差観が強かった。また、母親の男女の特性の原理が強いほど、個人の能力や話し合いによる手続的公正の原理が弱いほど、娘の母親への服従観が高かった。一方、母親の機会の平等や個人の能力、話し合いによる手続的公正の原理が強いほど、娘は母親を一人の人間として認知していた。そして、娘が母親とポジティブな関係を築いているほど、自身の機会の平等が高かった。また、母親を一人の人間として捉えているほど、機会や個人の能力、話し合い

による手続的公正の原理が高かった。一方、母親への服従観が強いほど、機会の平等や個人の能力、話し合いによる手続的公正の原理が低かった(表1)。

Table 1 娘の母親観と母親および娘自身の性差観、男女平等の判断基準との関連性(n=207)

| 男女の特性 | 男女平等の判断基準 | | | | |
|-------------|-----------|---------|-----------|-----------|-----------|
| | 必要性 | 機会の平等 | 個人の能力 | 均等配分 | 話し合い手続 |
| 性差観 | .568 *** | -.013 | -.448 *** | -.300 *** | .022 |
| | .459 *** | .141 * | -.329 *** | -.217 ** | -.294 *** |
| ポジティブな関係と影響 | .047 | .034 | .092 | -.026 | -.038 |
| | .002 | .021 | .146 * | .017 | -.042 |
| 母親との対立 | .047 | .036 | -.099 | -.053 | -.006 |
| | -.052 | .037 | -.114 | -.070 | .054 |
| 母親への服従 | .154 * | -.094 | -.134 + | -.184 ** | -.076 |
| | .120 + | -.122 + | -.170 * | -.191 ** | -.122 + |
| 一人の人間としての認知 | -.088 | .116 + | .265 *** | .246 *** | .018 |
| | -.032 | .079 | .277 *** | .350 *** | .072 |
| 両親の関係 | .018 | -.008 | -.010 | -.038 | .096 |
| | -.067 | .024 | .057 | .091 | .064 |

注)各セルの上段は母親の男女平等の判断基準と娘の性差観および母親観との相関係数。下段(イタリック体)は娘の母親観と自身の性差観および男女平等の判断基準との相関係数を示す

以上のことから、母親の男女平等の判断基準は娘の母親観に関連し、娘の母親観は娘自身の男女平等の判断基準と関連していることが明らかとなった。

(4)男女差の検討

図3、図4に示したように、男女にかかわらず、一人の人間として母親を客観的に認知していることが、男女平等の判断基準(「個人の能力」および「話し合いによる決定」)ならびに性差観の弱さに関連していた。また、男性では「母親との対立」、女性では「母親への服従」といったネガティブな関係性が性差観の強さと関連していた。これらの結果は、母親との関係性が青年期における男女の役割観およびその判断基準に影響することを示唆するものといえる。

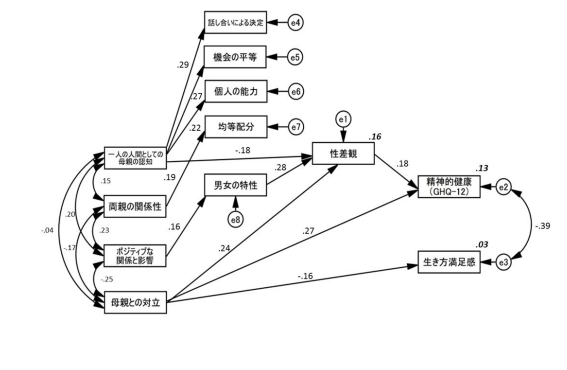


図3 男性のパス図

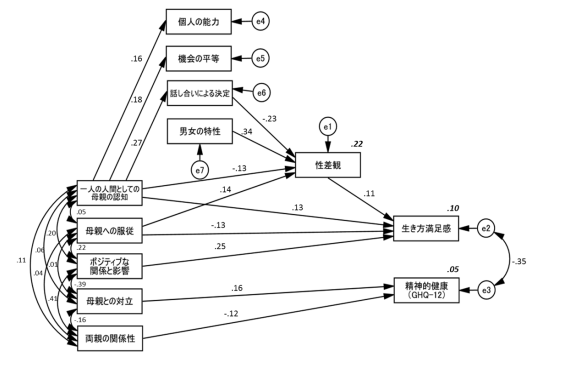


図4 女性のパス図

(5)まとめ

女性大学生に対するインタビュー調査では、仕事優先の将来設計に母親の働く姿だけでなく、助言や支持的な態度が促進要因となっていることがわかった。フェミニストの母親と娘に対するインタビュー調査では、娘は母親の生き方や価値観に敬意を示しつつも、自らの生き方を選び取っていく傾向が見られた。母娘ペアに対するweb調査では、娘の母親観が娘の男女平等観に影響を与えていることがわかった。男女大学生に対する質問紙調査でも、男女に共通して母親観が影響を及ぼしていた。これらの結果は、インタビュー調査と質問紙調査のいずれにおいても共通して見出されている。今後は、母親と娘の関係をとりまく幅広い人間関係や影響力にも配慮しながら、次世代の男女平等意識の形成に寄与する要因について詳細な検討が必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

1. 青野 篤子(2016).男女平等意識の継承性：フェミニストの母から娘へ 福山大学人間文化学部紀要, 16, 79-90. (査読無)
2. 青野 篤子・岩本 一貴・谷元 絢子・阿部 純・松井 久子(2016).ラウンドテーブル：フェミニズムの継承 福山大学人間文化学部紀要, 16, 165-176. (査読無)
3. 澤田 忠幸・宇井 美代子・滑田 明暢・青野 篤子(2016).大学生の男女平等の判断基準と母親観および精神的健康との関連性 愛媛県立医療技術大学紀要, 12, 23-30. (査読無)
4. 青野 篤子(2016).男女平等意識の継承性 - 母と娘の語りを通して - 福山大学こころの健康相談室紀要, 10, 51-59. (査読無)
5. 青野 篤子(2015).男女平等意識の継承性 - 娘の語りを通して - 福山大学こころの健康相談室紀要, 9, 1-9. (査読無)
6. 青野 篤子(2014).娘からみた母親と世間の恋愛観 福山大学人間文化学部紀要, 14, 63-73. (査読無)

[学会発表](計8件)

1. 青野 篤子(2015). 母親から娘への継承ラウンドテーブル『フェミニズムの継承』(2015年10月25日 広島県福山市 コワーキングスペース HaLappa)
2. 青野 篤子・澤田 忠幸・宇井 美代子・滑田 明暢(2015).母親から娘への男女平等観の継承 日本社会心理学会第56回大会発表論文集, 414. (2015年10月31日~11月1日 東京都杉並区 東京女子大学)
3. 青野 篤子(2015).男女平等意識の継承 - フェミニストを母にもつ娘の人生径路 - 日本心理学会第79回大会発表論文集, 1276. (2015年9月22日~24日 名古屋市熱田区 名古屋国際会議場)

区 名古屋国際会議場)

4. 澤田 忠幸・宇井 美代子・滑田 明暢・青野 篤子(2015). 母親から娘への男女平等の継承 日本心理学会第79回大会発表論文集, 1275. (2015年9月22日~24日 名古屋市熱田区 名古屋国際会議場)
5. 青野 篤子・滑田 明暢(2014). 男女平等意識の継承 - フェミニストの母親から娘へ - 日本心理学会第78回発表論文集, 1255. (2014年9月10日~12日 京都市上京区同志社大学)
6. 青野 篤子・滑田 明暢(2014). 男女平等意識の継承 - 母親の語りから - 日本社会心理学会第55回発表論文集, 243. (2014年7月26日~27日 札幌市北区 北海道大学)
7. 青野 篤子・滑田 明暢(2013). 男女平等意識の継承 - 娘の語りを通して - 日本社会心理学会第54回大会発表論文集, 282. (2013年11月2日~3日 沖縄県宜野湾市 沖縄国際大学)
8. 青野 篤子(2013).娘からみた母親と世間の恋愛観 日本心理学会第77回大会発表論文集, 1226. (札幌市白石区 札幌コンベンションセンター)

[その他]

ホームページ等

<http://rdbv.fukuyama-u.ac.jp/view/6XvIm/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

青野篤子 (AONO, Atsuko)
福山大学・人間文化学部・教授
研究者番号：70202489

(2)研究分担者

澤田忠幸 (SAWADA, Tadayuki)
愛媛県立医療技術大学・保健科学部・准教授
研究者番号：50300447

(3)研究分担者

宇井美代子 (UI, Miyoko)
玉川大学・文学部・准教授
研究者番号：80400654